

第 631 回：問題設定を試してみる（2）（DM）

みなさま、こんにちは。LA 毎週月曜 14:00~17:00 担当、博士課程（後期）の DM です。今回は、問題設定の際に参考文献を読むことの重要性について、紹介していきます。

前回の連載分にて、私は、『死霊』という小説作品を対象に、その主人公である三輪与志における「不快」を主題にしてみる、という問題設定を行いました。主題と対象を設定するのが、論文の問題設定です。そう考えると、今回の問題設定は、一見すると、定義上はこれでひと段落ついた、と言えなくもなさそうです。

ただ、私が思うに、この問題設定は、これだけでは不十分だと思います。なぜなら、これだけだと、「私がこの作品を読んで関心を持ったから」としか、設定した問題の根拠を説明できないからです。関心を持つことはとても大事なのですが、自分の関心というのは、言わば主観的なものですから、それ単体では、客観性を得ることができない。では、どうすればよいのか。

私としましては、最初の問題設定の段階で、調査対象と一緒に、それにまつわる何らかの参考文献を読んでおくことをオススメいたします。なぜなら、その文献の中に、もし、自分の関心の対象と関連した記述があれば、その記述の言葉を、自分の関心の対象が重要であると主張する根拠として、使用することができからです。先に具体例の方からご紹介いたしましょう。

実は私は、『死霊』を読みかけていた段階で、外大図書館に行って、或る書籍を借りてきていたのです。それが、『鑑賞日本文学』の第三十巻です。この本には、埴谷雄高につ

いて、伝記と作品とが、万遍なく解説されています。つまり、入門書ですね。そして、この巻にて磯田光一という執筆者が担当している「埴谷雄高の人と作品」という論考を読めば、三輪与志の言う「不快」は、より正確には「自同律の不快」と呼ぶべきものであるということ、そして、『死霊』の主題の一つをなしているのは「自同律の不快」である」（磯田 1982:22）という、よりはっきりした記述があること——これらのことが分かるのです。

ここで私は、自分が「自同律の不快」を主題に設定することに対する、ひとつの根拠を手に入れたと言えます。なぜなら、上に引用した記述によって、私だけでなく、磯田光一という私でない論者も、この主題の重要性を指摘している、という事実を指摘することが可能となったからです。すなわち、この主題の重要性は、少なくとも、私だけの思い込みではないということを、事実を使って主張することが可能となったわけであります。

もちろん、最初の問題設定の段階では、参考にするのは新書や入門書になるでしょう。それでいいのです。肝心なのは、「自分の問題設定に近い問題が、既に他者によっても指摘されている」という事実を見つけ、自分の問題設定に客観的な根拠を与えることであるからです。ちなみに、レポートにおける「事実」とは何かということについては、木下が詳しくまとめています（木下 1994:036-045）。

というわけで、今回の LA 通信はここまでです。次回は、文献を活用しながらさらに問題設定を確実なものにしていく方法をご紹介します。みなさま、何とぞよろしくお

第 631 回：問題設定を試してみる（2）（DM）

願いたします。

参考文献

磯田光一「埴谷雄高の人と作品」磯田光一、
北川透[編]『埴谷雄高；吉本隆明』（鑑賞日
本現代文学；第 30 巻）、角川書店、1982 年：
N910.26=14=30、閲覧室書架

木下是雄『レポートの組み立て方』（ちく
ま学芸文庫）筑摩書房、1994 年：N080=30=7-
1-1、閲覧室入口正面